

古典文学教育論

鳴門教育大学 世羅 博 昭

大槻先生の古典指導方法論

大槻和夫先生が高校の古典指導の在り方について論じられたものに、

- ・「生き生きとした古典の学習を求めて」(396)
 - ・「古典の授業を魅力あるものに」(9)
- がある。それらの中で、大槻先生は、

古典は常に再発見されることによって古典であり続けてきた。そこで再発見されたものの多くは、その時代に欠けているか失われている何かであつたように思われる。高校の古典の授業も、高校生がそこに何かを発見するようなものであつてほしい。」(9、213頁)

という願いのもとに、古典の指導方法に関するさまざまな提案を行つておられる。それらの提案を簡条書きに整理すると、次のようになる。

① 高校生が古典に直接触れる前に、現在使われている「くだもの」「いかづち」などのことは語源やさまざまな民俗行事・年中行事のいわれなどを教師が語る

ことによつて、高校生の心を自然に古典に向けていく〈古典学習への地ならし〉の指導が必要である。

② 実際に、生徒を古典と出会わせる導入段階においては、現代と同質性を持つ古典教材から入るのがよい。「論理は苦手でも感覚的には鋭いものをもっている」高校生には、「枕草子」の「春はあけぼの」のような、彼らが〈感覚的にわかる〉古典教材を用いるのが有効である。また、古典を繰り返し音読・朗読して、古典のもつリズムを体感させることによつて、古典に親しみを持たせることも大切にしたい。

③ 導入段階の〈感覚的にわかる〉指導から、次には〈精確に分かる〉指導へと発展させるのが指導の順序である。〈精確に分かる〉指導においては、古典を読み深めていく視点と方法を学ばせて、古典の分かり方を切り開いて見せてやるのが大切である。次の三つの視点から、古典を読み深めていく方法を示したい。

第一に、古典の文章を精確に読み深める上で鍵となる一語にこだわつて、その語の意味・用法を追究していくことが、どのように文章全体を深くとらえていくことに機能するかを生徒に示すとともに、その方法も学ばせるようにする。

なお、〈精確に分かる〉指導に必要な古典文法の指導にあつては、文法に着目すると、そこまで深く読み味わうことができるのだということを実感させる指導から、古典文法の取り立て指導へ、そして、身につけた文法的知識を古典解釈に結びつけていく指導へ、といった展開の文法指導を行うことが肝要である。

第二に、古典を〈歴史の中に置いてとらえる〉という読み方に目を開かせるとともに、その方法も学ばせるようにする。

なお、この読み方には、古典作品を〈時代社会〉の中に置いて読み深め、古典の側から現代という時代とそこに生きる人間の生き方をとらえ返す読みの方法と、古典作品を〈文学史的・文芸史的な流れ〉の中に置いて、その作品が何を新しく創造したかを讀みとらせる方法とがある。

第三に、同一素材にもとづく古典と現代の作品とを読み比べて、共通点や相違

点を明らかにするとともに、そのような読み方もあることを学ばせるようにする。

大槻先生が示された古典の指導方法論は、まことに説得力に富む、実践に生きたる指導方法論である。なかでも、③の「古典を読み深めていく視点と方法を学ばせて、古典の分り方方を切り開いて見せてやる」という指導は、今後、実践の場でおおいに試みられることが期待される。

古典教育の実践

このような古典の指導方法論を応用して論じられたものとして、次の三つの論考を位置づけることができるであろう。いずれも、前項③の第一と第二を応用したものである。

A 「『今昔物語』へ馬盗人」―教材の扱い方と実践授業の展開(20)

先行研究をふまえ、教材の本質を的確に把握したうえで、教材としての価値や実践授業の展開案が示されている。大槻先生は、ことばを手がかりに、形象をイメージ豊かに生き生きと読みとらせる学習を展開したうえで、教材の歴史的意義に目を向けさせる指導、文体に着目した古典指導、敬語に着目して、当時の武士階級の父子の関係を把握させる指導など、表現と内容を統合的にとらえる、古典の読みの指導の在り方を提案しておられる。

B 「万葉の旅から」(409)

「万葉の旅から(続)―志賀皇子の歌を中心に―」(410)

「万葉の歌を現地で味わうとは、眼前の風景を舞台として、想像力によってそこに古代のドラマを繰り広げ、そのドラマの中に歌を置いてみるということなのではないか」という考えのもとに、風土的・歴史的背景をふまえ想像力を發揮して、万葉歌をイメージ豊かに読み味わうとともに、その読みの方法が示されている。

C 「古典を学ぶ」(東広島市「古典を読む会」編、一九九八・五)

大槻先生は、昭和六二年に、東広島市中央公民館の講座の講師をされて以来、毎月一回、「万葉集」「徒然草」「伊勢物語」「平家物語」などを読んでこられた。この冊子は、その一〇周年記念誌である。古典の時代背景をふまえ、その時代を生きたる人間を生きたる浮き彫りにされる大槻先生の講義は、受講者に深い感銘を与えたことが、その感想文からうかがえる。ここにも、古典作品を歴史の中に置いて読み味わっていくという読み方が展開されている。

大槻先生と古典学習

大学時代の恩師である土井忠生先生や清水文雄先生から学ばれたことについて書かれたものに、「土井先生に教えていただいたこと」(372)、

「清水文雄先生への私信」(378)、「折り折りのことば」(39)がある。大槻先生は、土井先生からは、「個を個としてとらえ、特殊を特殊として問題にしながらも、その追究のいたるところは、個をこえ、特殊をこえた普遍の世界であった」(372、311頁)という古典解釈の方法を、また清水先生からは、古典を読むときに、「一つの語の意味を深く追究するだけでなく、「そこから人間の生きたる姿、心の深み、時代の精神、文学性を見事にえぐり出」(391、188頁)される文学研究の方法を学んでおられる。大槻先生の古典の読みの確かさと深さ、表現の背後に人間存在の深淵を見出す読み方は、この両先生から学ばれたものが深められていったものと考えられる。

これらの他に、「徒然草からの入試問題の分析」(14)がある。あるべき国語教育と受験準備のための国語教育とを統一できないかという問題意識のもとに、徒然草から出題された入試問題の分析を行い、その結果、文章の内容を読みとる過程で、必要に応じて、語釈、文法的な解釈を行うように授業を仕組むことが大切であることを明らかにしておられる。私もこの解決法しかないと考えて、高校に勤めているときに実践研究を行っていた。